女スパイへの尋問

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
女スパイへの尋問

【Ｎコード】
Ｎ２６８０ＢＹ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
米国の官憲に捕らえられ、尋問を受けるロシア人女スパイへの苛酷な割礼拷問。

（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

フロリダのリゾート地――ケープハテラスサウンドでバカンスを楽しんでいたアーニャ・チャップマンは、突然、ホテルの部屋に踏み込んできたＦＢＩの係官によって逮捕された。その容疑は国家機密漏洩罪――要するにスパイ罪だった。実際、彼女は自らの美貌と魅力的な体を駆使して、これまでに何人ものアメリカ人男性から数多くの国家機密を盗み出していた。

なぜかはわからなかったが、アーニャはＦＢＩの施設ではなく、一番近い軍の基地まで連行され、そこでＭＰに引き渡された。大西洋の小さな島に設営された極秘施設へ向かう小型のビジネスジェットに乗せられても、彼女はまだ状況を楽観視していた。

（どうせ何も話さなければ、彼らは私を釈放せざるを得ないわ！）

ジェット機が亜熱帯の島に着陸したとき、機外には車輪付き担架と二人の看護師が待ち構えていた。看護師たちはスパイ容疑者を護送してきたＭＰの手を借りて、アーニャを素っ裸にすると、担架上で身動きできないように拘束した。それから、彼女を乗せた担架は、看護師に押されて滑走路脇にある兵舎へと運ばれた。

アーニャは自分が強姦されるに違いないと確信していた。しかし、アメリカの軍人たちの男根が自分にとっては決して大きくないということを自覚していたので、とくに不安を感じることもなかった。そして、今、彼女は犯されること以上の、いかなる懸念も持ち合わせてはいなかった。どちらかというと、これから自分の身に降りかかるだろうことに対して、性的な興奮を覚えていたくらいだった。

しばらくすると、アメリカ陸軍の将官服を身にまとった壮年の男性が現れた。大柄な体格のがっしりとした肩には、准将の階級章が燦然と輝いていた。彼は担架に固縛されたアーニャにゆっくりと近づくと、その紳士然とした顔に似合わない下品な言葉遣いで話し始めた。

「よく聞けよ！　売女！！　俺たちゃ、貴様を輸して遊んでる暇はねぇんだ。今すぐ、洗いざらい白状しろ。そしたら、このまんまロシアへ帰してやるぜ。だがよ、口を割らないっていうんなら、女に

生まれてきたことを後悔する羽目になるぜ。どうせ、最後にゃ全部吐くんだ。さっさとゲロった方が身のためだぜ。後で吐いたって強制収容所送りだかんな。そこじゃ、イスラムの外道どもに子袋が破れて押っ死ぬまで輪し尽されるぜ」

アーニャは准将の脅迫じみた言葉に怯えた様子を見せず、同じく野卑な兵隊口調で言い返した。

「くたばりやがれ！　この玉なし豚野郎！！」

それに対して、准将は激高するわけでもなく、軽く眉をひそめただけで、無言ままアーニャの頬を平手で打った。それから、MPと看護師の方に振り返ると、彼女の運命を決する決定的な命令を発した。

「さっさと連れていけ！」

アーニャは全裸のままで車輪付き担架に乗せられ、別の兵舎へと運ばれていった。その途中、何人もの兵士たちとすれ違い、彼らの多くは彼女を揶揄するように口笛を吹き鳴らした。そして、担架が到着した手術室のような部屋は、その中央付近を囲むように多くの撮影機材が設置されており、天井に設置されたハロゲン灯によって煌々と照らし出されていた。

今、アーニャを乗せた車輪付き担架は、それらの撮影機材の真ん中に留め置かれていた。部屋の状況を見定めた彼女は、これから拷問的な尋問が自分に為されるに違いないと悟ったが、少しも怯えてはいなかった。当然ながら、捕まれば拷問されるかもしれないことは想定済みのことだった。

護送してきたMPたちが部屋を出ていくと、二人の看護師は車輪付き担架の、アーニャの足側へと移動し、ガチャガチャと何かを操作した。すると、担架の末端部が足を乗せたまま左右に広がり、さらに臀部と膝下の部分でも折れ曲がって、彼女の足は大きく開いた状態で上方へ持ち上げられてしまった。その結果として、彼女は性器を完全に晒け出すこととなった。

そのように婦人科の診察を受けるような姿勢を取らされたアーニ

ャは、この車輪付き担架が囚人をレイプするための構造を有していたことを実感した。そして、これらの準備が整うのを見計らったかのように、白衣を着込んだ小肥りの男が入室してきた。彼は車輪付き担架に近づくと、当り前のように彼女の広げられた足の間に立った。

その男の熱い視線が股間を舐めるようにして注がれているのを意識したアーニャが拷問的なレイプを覚悟したとき、穏やかな声が降ってきた。

「はじめまして、チャップマンさん。私は軍医のヴィルヘルムと言います。私が行う特別な術式の献体者になってくれたことに対し、感謝の言葉を述べさせていただきます。本当に、ありがとうございます。そして──」

軍医を名乗ったドイツ訛りの男は、おもむろに彼女の外性器の前に屈み込み、大陰唇をくつろげて陰核包皮を剥け上げると、その外気に晒された薄桃色の肉真珠に接吻した。

「──あなたのクリトリスに賛辞を呈します！」

アーニャは医師の行為に困惑していた。

(いったいアメリカ陸軍は、どうなっているの？　こんな変質者を軍医にしてるなんて！)

そんなことを考えたアーニャだったが、やはり怯えてはいなかった──この辱めが自分に多くオルガズムをもたらすかもしれないと秘かに期待もしていた。しかし、医師は、それ以上の性的な行為は行わず、彼女の頭の方に回り込むと、今度は彼女の額にキスをしてから本当に嬉しそうに囁いた。

「本当に感謝します、チャップマンさん。献体者がいなくて、なかなか私のテクニックを試す機会がなかったのです。将軍にも感謝しないと……」

自らの意志で、この医師の言うところの『献体者』になったわけではなかったので、アーニャとしては沈黙を守り通した。そのとき、彼女は看護師の一人が軍医と入れ替わるようにして自分の股間に移

動したことに気づいた。
　看護師は傍のトレイを引き寄せると、その上に並べられた道具を使って、アーニャの外性器を素早く剃毛していく。そして、恥丘から大陰唇まで性毛のすべてを完全に剃り落とすと、次に脱脂綿のようなもので外性器全体を拭き始めた。陰門の内側――小陰唇の表裏や陰核包皮まで剥き上げて隅から隅まで徹底的に行う――ひんやりとした皮膚感覚から、それはアルコールによる消毒に違いなかった。
　アーニャは、これら一連の処置に戸惑っていた。ここに来て、ようやく、自分に為されようとしていることが単なる性的な辱めやありきたりの拷問ではないらしいということに思いが至ったのだ。もちろん、そのような不安はおくびにも出さない。伊達にＫＧＢでスパイの英才教育を受けてきたわけではないのだ。
　諸々の作業を終えた看護師がアーニャから離れると、ヴィルヘルムが、再び、彼女の足の間に入ってきた。そして、彼が別の看護師に向かって無言のまま右腕を差しだすと、その手に小さな外科用鋏が渡された。医師は満面の笑みを浮かべながら、受け取った鋏を彼女の目の前にかざしてみせる。
（この変態医者は、いったい何をするつもりなの？）
　軍医が尋問のための威し文句さえも口にしないため、アーニャは未だにアメリカ軍の目的を図りかねていた。ただ、外科用鋏の鋭利に光る刃先を見せつけられたことにより、言い様のない不安と今までに感じたことのないほどの暗い予感を覚えた。
　腰付近で両側に立っている二人の看護師が自分の下腹部に向けて手を伸ばす姿を目にしたアーニャは、すぐに大陰唇の左右の柔肉に指があてがわれ、それが大きく広げられるのを感じた。さらに医師が右側の小陰唇を掴み、可能な限り引き伸ばそうとして、それを上方に向かって軽く引っ張っているのも感じた。そして、引き伸ばされている小陰唇の下方に何か冷たいものが触れたと感じた瞬間、そこから熱い痛みが駆け上がった。
　その痛みは、たちまち耐え難い激痛へと膨張する――アーニャは

拘束された担架から逃れようと、ちょっとでも動かせそうなところ、腕や足、体などを必死になって動かそうしたが、それらの行為は、すべてが無駄骨に終わった。完全に身動きを封じられた状態の彼女は、ついに大声で叫び始めていた。

「いやっ、やめてーっ！　いやーっ！！」

アーニャは閉ざされていた鋏の刃先が開き、再び閉じられるのを感じた。それは最初のものよりもはるかに大きな痛みをもたらした――まるで繊細な肉襞が引き裂かれるのと同時に焼かれているようにも感じられた。とても現実の出来事とは思えないが、今、彼女の小陰唇は軍医が操る外科用鋏によって無造作に断ち切られているのだ――次から次に湧き上がる激痛が稲妻のように全身を駆け巡る。

アーニャの喉から発せられる絶叫が兵舎中に響きわたると、勤務する多くの兵士たちが作業の手を止め、その悲鳴に耳を澄ます。誰もが美貌の女囚が受けているだろう拷問に思いを馳せて愉悦の表情を浮かべていた。実際に、どのような拷問が裸に剥かれた美女に為されているかまでは知る由もなかったが、彼らはリフレッシュした気分で課せられている仕事へと戻っていった。

そして、最後に軍医が千切れかかった肉襞を強引に引き剥がそうとしたとき、これまでに経験したことのない不気味な感覚がアーニャを襲う――その直後、その部分は言い様のない喪失感を彼女にもたらしながら勢いよく裂けた。焼けるよう疼痛を残して右側の小陰唇は、彼女から永久に失われたのだ。

さらに、アーニャは手術用のゴム手袋をした指先が左側の小陰唇をも引っぱっているのを感じた。右側のときと同じように、最初のカットが無造作に為されたとき、やはり焼けるような激痛を感じた。彼女が耐えきれずに盛大に失禁し始めたとき、大声で笑う軍医の声を聞いたが、苛酷な切除作業が容赦なく続けられたために、彼女の意識は闇に閉ざされていった。

アーニャが意識を取り戻したとき、鼻の下にアンモニアタブレッ

トを近づけている看護師の指を認めた。強制的に目覚めさせられたことを認識した瞬間、彼女は自らの外性器が取り返しがつかないほど傷つけられたことを思いだして怖気だった。まさか麻酔も施されずに小陰唇を切り取られるなどとは夢にも思っていなかったのだ。
（アメリカ軍が、こんな狂気じみた拷問をするなんて……！）
　室内に充満した血の臭いも相まって、アーニャは吐き気を覚える。そのとき、軍医が朗らかな笑みを浮かべつつ、彼女の顔を覗きこむようにして囁いてきた。
「お帰りなさい、チャップマンさん。私は、あなたに最も貴重な瞬間を逃してほしくはないのです！」
（この変態医者は、まだ何かするつもりなの？　『最も貴重な瞬間』って、なんなのよ！？）
　叫びすぎて声を完全に嗄らしてしまったアーニャは悲鳴を上げるどころか、ふつうに声を出すことさえもできなかった。まるで女性器全体が燃えているかのような激しい痛みで、全身を汗まみれにして、ただ激しい喘ぎを繰り返すだけだった。
　そんなアーニャが灼熱の疼痛に冒されている股間の状態を確認すべく、やや頭を持ち上げて下半身の方へ目を向けると、丁寧に剃られて無毛となった恥丘越しに、天に向かって聳立するように立ち上がっているピンク色の芋虫が目に入った。それは頭の部分を手術用の糸によって結ばれ、一人の看護師の手によって上方へ引っ張り上げられていた。
　だが、それが芋虫の類でないことは一目瞭然だった——胴体下方から伸びる尻尾が三本に分かれているのだ。ピンと張っている手前のものは細身だったが、その後ろで左右に分岐しているものはやや太さがあった。ただ、そのいずれもが血にまみれている。
　アーニャは、その不気味な光景を目にして絶望に打ち震えた——彼女は理解したのだ。それが体外へと引き出されている自分自身の陰核器官であるということを！　そんな恐怖に戦く献体者の表情を満足げに見つめていたヴィルヘルム医師がわざとらしく大きな声を

発して告げる。

「チャップマンさん、二度と経験することができない瞬間です。十分に堪能してください」

いつの間にか変態医師の右手には小陰唇を切り取ったものに比べ、やや長めの外科用鋏が握られていた。彼が何をしようとしているかは、もはや明白だった。

（この医者は、本物の変質者なんだわ。ラビアだけじゃなくてクリトリスまでも切り取るつもりでいるんだわ……）

アーニャは切っ先をやや広げた外科用鋏が吊り上げられている芋虫状器官の下方――陰核を恥骨上部に留めているやや細めの繊維組織へとあてがわれていく様を恐れに満ちた目で凝視し続ける。

「それでは始めます、チャップマンさん！　――1（アインツ）！！」

その掛け声とともに外科用鋏の刃先が閉じられ、最初のカットが為される――限界まで引き伸ばされていた陰核堤靭帯は付け根から切断されたことにより、上方に向かって勢いよく跳ね上がった。その非現実的な場面を目の当たりにしたアーニャは瞳を大きく見開いて全身を硬直させる。

間を置かず、刃先を広げた外科用鋏の切っ先が残っている二本の肉根のうち、右側の方へと移動していく――アーニャは制止の言葉を発しようとするが、痛めた喉からは擦れた声しか出てこなかった。

「……っ！」

（やめて！　切らないで！！）

そんなアーニャの心の叫びを無視するように、ヴィルヘルム医師は再び無情なカウントを口にする。

「2（ツヴァイ）！！」

その発声と同時に、二番目のカットが為され、右側の陰核脚がその根本で断ち切られた。

「3（ドライ）！！」

そして、三番目のカットとなる、もう一方の陰核脚の切断も為される。ただし、アーニャの陰核は陰核神経と血管によって、未だに

体と細々繫がっていた。しかし――。

「4（フィーア）！！」

――その直後、四番目のカットによって、敏感な性感神経と血管が同時に断ち切られる。その瞬間、アーニャの目前で何千もの星が煌めいて意識が真っ白に染まった。彼女は信じがたい苦痛によって、全身を細かく震わせながら激しく喘いだ。すでに医師の手許を見ている余裕などはなくなっていた。

「これで終わりです、チャップマンさん！　――5（フュンフ）！！」

最後に、五番目のカットが左側の陰核神経と血管を切断する――今まで何度となくオルガスムをもたらしてきた性的な中枢器官が完全に切り離された瞬間、アーニャは自分の頭が爆発するのではないかと思えるような激痛を受けて、喉が張り裂けんばかりの絶叫を張り上げようとした。しかし、それはやはり声にはならず、一方的に息を吐き出すだけの行為にしかならなかった。そのせいで、彼女は十分に空気を吸うことができず、その顔色を真っ青にしていた。そして、ついには酸欠によって意識を失ってしまった。

しかし、消毒用のアルコールがたっぷりと染みている医療タオルを切り刻まれた女性器に押し当てられたアーニャは焼けるような激痛に見舞われて、直ちに意識を取り戻させられた。彼女の上げる悲鳴は、もはや人間の声ではなく、動物の、それも野生の獣のように不気味な咆哮になっていた――頸動脈は異常に鼓動し、目も飛び出さんばかりに血走っていた。看護師は、そんな彼女の苦悶など一片も斟酌せず、繊細な肉襞と肉芽が切り取られた傷口を医療タオルで荒々しく拭いていく。

仕事をやり遂げた充足感に満たされた軍医は、アーニャから摘出したばかりの陰核器官から血を丁寧に洗い落とすと、保存液が満たされているガラス容器をトレイから取り上げ、その中に標本をそっと落とした。それは割礼手術の模様を撮影した映像データとともに貴重な医学サンプルとなるものであるが、同時に彼の個人的な『収集物』でもあるのだ。

そのとき、准将が別室から手術室にやってきた。
「なかなか面白いもんを見せてもらったよ、先生。俺も野郎の一物なら切り落としたりしたことはあるんだが、雌豚からビラビラやサネを切り取ったことはなかったんでな。これから楽しみが増えたってもんだぜ！　——これで、この強情な雌豚も口を割るだろうよ。まあ、今さらゲロったところで、強制収容所送りでテロリストどもに輪されちまうんだがな」
　准将の発する残忍な言葉を耳にしながら、アーニャは再び深い闇に落ちていくのだった。

（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は　ｌａｉｒ－ｏｆ－ｈｏｒｒｏｒｓ．ｃｏｍ　というアダルトSNSの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループ „Ｎｅｗ　Ｅｍｂａｂａ „に投稿された　Ｋｕｎｔａ　氏による、„Ａｎｎａ　Ｃｈａｐｍａｎ　－　Ｃｏｍｍｉｅ　Ｓｐｙ　－　Ｍａｄｅ　ｔｏ　Ｔａｌｋ „です。

話自体は大した内容ではないのですが、いわゆる時事ネタというものです（現時点では昔話なので、知らない人はググってみてください）。実際に起きた事件を題材に妄想を膨らませたもので、女スパイが割礼されるというシチュエーションの必然性とかは一切無視されています（笑）　だいたい、尋問自体、最初に1回質問しただけで、割礼拷問中には何も尋ねていません！

この作品のタイトルですが、原題は　„Ａｎｎａ　Ｃｈａｐｍａｎ　－　Ｃｏｍｍｉｅ　Ｓｐｙ　－　Ｍａｄｅ　ｔｏ　Ｔａｌｋ „で、直訳すると『アンナ・チャップマン――共産圏のスパイ――自白せよ』となりますが、一応、アンナ・チャップマンは実在の人物ですし、また、やや長すぎるので『女スパイへの尋問』とすることにしました。なお、当然ながら、本文の中にもアンナ・チャップマンの名は何度も出てくるので、ファーストネームの方をアーニャと変更してあります。

翻訳というよりは意訳に近いので、原文の直訳とはずいぶん違っています。とくに一番大事な割礼シーンは大幅に追加・増補しています（笑）　直訳だけでは若干寂しすぎるので……。もともとの原文自体が、そんなに長くないストーリーなので、どちらにしても全体的に飛ばし気味の感じは否めません。ですので、いずれはもう少し補いたいと思います。とりあえずは暫定公開版というところです。